



海外出張で感じたこと

直接見ることに
勝るものはない!

今回のプロジェクトでは、機械搬入前に私たちもドイツへ視察に行ってきました。実は最初の時点で行く気はなかったのですが、打ち合わせで「ドイツはドイツの考え方で機械を作っているの、図面を見ただけでは紐解けないことがあるのでは?」という意見が、その意見に納得し、据付側の責任者として私も同行することになったのです。

実際、現地の機械を見ともらっていた図面通りに作られているようでしたが、やはり装置の組み付け方を理解するには直接見るのが一番と実感!ただ目の前にある機械がどのようにバラされて日本に運ばれるのかまではわからず、そこは日本に届いてからのお楽しみとなりました。他にも世界の自動車業界をリードするドイツらしく、工具や道具が私たちの使用しているものとは全く異なり、新鮮で勉強になりました。

プロジェクトでの当社の役割

図面作成から機械設置まで
全て担当

まずはドイツの機械メーカーからもらった図面を元に、工場の設置場所の図面を起こします。この設計作業は工事の土台となるため、お客様とは何度も打ち合わせを重ねます。

「機械の設置場所はここで良いのか」

「どのように設置を進めるのか」

「水や空気の流量を起こすための機械はこれで良いのか」など、検討と提案を繰り返し1つずつお客様の承認をとっていくのです。続いて設計のOKが出た箇所から、見積もり作成へ。見積もりが承認されて受注をしてから、ようやく必要材料の発注や工事段取りへと進むことができます。

製品は、ドイツから船便で約2か月かけて日本へ運ばれます。神戸港での税関手続きは全てM社が行ってくれるので、私たちの仕事は港で製品の荷姿確認と搬入の段取りを決めること。荷役会社が製品を現場まで運んでくれるので、事前に決めた順番で製品を搬入し施工スタートです。

お客様の「こんな作れる?」に応えられる企業として、数々のプロジェクトを遂行してきた当社。
今回は小澤製作所初の海外プロジェクトについて、サブディレクターの深見さんに紹介してもらいます。
海外出張では新しい技術を学んだだけでなく、日本人の仕事への意識の高さも再確認できたのだとか。新たに成し遂げた大きな一歩に注目です!

小澤製作所
大プロジェクト



製造本部 サブディレクター

ふかみ 英司
深見 英司さん

深見さん海外出張へ! 不織布製造装置工事



【プロジェクト名】不織布製造装置設置

プロジェクトスタートまでの経緯

技術力と連携力の圧倒的信頼のもと、
プロジェクトに加入

プロジェクトの発注元は国内の大手化学企業で、あるドイツ製の不織布製造装置を輸入したいという話からスタートしました。その依頼を受けたのが、国内の機械総合商社「M社」。M社はアメリカ シカゴ、ドイツ フランクフルト、台湾 台北、中国 上海など世界各都市にも支店がある商社で、発注元から「この要望に応えられるのはM社しかない!」と抜擢されたのです。しかしM社はあくまで総合商社。機械は輸入できても設置はできません。そこで声がかかったのが当社というわけです。当社はこれまで3回ほどM社の大型プロジェクトに携わっており、技術力とワンストップの対応力が高い評価をもらっていました。今回も「この手の機械関係は小澤さん一択!ぜひお願いしたい」とM社から相談され、当社が一次下請けとしてプロジェクトに加わることに。営業担当の竹内さん、設計の澤井社長に私が応援として加わり、プロジェクトはスタートしました。



入社を目指す方へのメッセージ

チャレンジしたいことがある人には、最高の会社

当社は決して大きい会社ではありませんが、やりたいことにチャレンジできる環境があります。大企業では承認が下りるまでに時間がかかることも、そもそもリスクが大きくてできないこともたくさんありますが、当社は社長がOKすれば即GOです！たとえ煙たいことだとしても、「挑戦したい！」という意欲に対しては全面的にバックアップしてくれます。何か新しいことをしたい人や、恐れず挑戦したい人には魅力的な環境だと思いますよ。

お客様の声

お客様の言葉が 新たな成長の原動力に

「小澤さんがいなかったら、こんなの設置できなかった」という言葉をいただいています。今回の発注元のお客様は大企業のため協力会社も多くいますが、「他の協力会社に頼んでいたら完成していなかったと思う」とのこと。お客様からとてもありがたい言葉もらい、私たちも満足の結果となりました。



プロジェクトで活かせた、小澤製作所の強み

妥協を許さない 日本人の心

小澤製作所の技術力と、日本人ならではの緻密さが活かされました。今回特に感じたのは日本人の仕事へのこだわりが、海外と比べて圧倒的に強いということ。設計に関しても機械の組み付けに関しても繊細な感覚をもつ日本人を、ドイツ人もとても感心している様子でした。ドイツ人が「OK」でも日本人は「NG」だったり、ドイツ人が「これくらいで良いよ」と言っても日本人は「そこまでやらないと意味がない」と言ったり。最終的には「そこまでやるならやってくれて構わないよ」とドイツ人が折れる形になり、日本人が求める完成度の高さを知ってもらえたと思います。

海外プロジェクトに参加して得た学び

言葉の壁に苦戦！ 「感覚」を言語化する難しさを痛感

私は前職での経験を合わせると海外プロジェクトに携わるのは今回で5回目でしたが、「言葉の壁」の大きさを改めて感じました。ドイツでは通訳がついて説明をしてくれましたが、正確に言葉を翻訳してくれる分、余計理解しづらいことも。特に日本の職人は感覚で仕事をすることも多いため、その感覚的な部分を理解するには通訳の話だけでは無理があったのです。実際、ジェスチャーと簡単な英語だけで話したドイツのSVとの会話のほうが、得られたことは多かったように感じます。最終的にドイツで学んだことを私が職人に伝えましたが、感覚はあくまで私の感覚だったのでそれもまた悩ましいところでした。